

死んでからも残り続ける「生の痕跡」

インターネットには膨大な数の「最期の言葉」が、消されることのないまま漂っている。しかもそのほとんどが意図されたものではなく、ただ放置されている状態だ。

直前の日常で止まったサイト

——「バイクでウラジオストクからダカールを目指す走行記録と、旅の中で出会った風景を写真でお送りしていきます」——「ブログの最初の投稿からは、これから始める旅に心躍らせている書き手の様子が伝わってくる。2012年5月、バイク旅行写真家を名乗る30代の日本人男性は、バイクでウラジオストクから北欧を経由してダカールに向かう旅の計画を実行に移した。この旅行記のために立ち上げたブログは、撮影機材を積み込んだバイクをウラジオストク行きのフ

エリーに乗せるため、東京から鳥取に移動するところから始まる。船は無事出航し、4日目に男性もウラジオストク入りした。「バイク無しでは原始人以下の私です。ああ、早く人間になりたい!!」。6日目の日記では、港に到着後に愛機を受け取る段取りが遅れてやきもきする心境を綴っている。それでも翌日には確実に受け取れることを確認。さあ、いよいよ明日から壮大な旅の軌跡が始まる……はずだった。バイクで港を発った1週間後、ブログの更新が滞るなか、ロシアのあるニュースサイトは、男性がモンゴルとの国境にほど近い東シベリアで暴漢に

襲われ、命を落としたと伝えた。起承転結の「起」までしか残せなかった無念のブログは、その無念さを知らない意気揚々とした雰囲気のまま、何事もなかったかのようにただ時を止めている。今も、ブログ上部には「記事が更新される毎にTwitterでツイートされます！」の文字が虚しく躍っている。

こうした事例は、今や珍しくなくなっている。インターネット上には、書き手が亡くなった瞬間で止まっているブログやホームページ、SNS（ソーシャル・ネットワークキング・サービス）のページが無数に漂っている。インターネットが

世間に普及して約20年。その間にこの世を去った日本人は約2000万に及ぶ。ネットに自分のページを持った人が亡くなること自体、ごく普通の出来事なのだ。他の例も見てみよう。2010年2月、ビジュアル系バンドのメンバーと機材を乗せたワンボックスカーは、次のツアー先の名古屋に向かって新名神高速道路を走っていた。メンバーがいつも通りにア

クセルを踏み込んで飛ばしていると、突然タイヤが破裂。満載状態の機材車は強くハンドルを取られ、激しく横転した。辺り一面に機材や販促用のCDが散らばるほど大破し、一台単独ながら新聞各紙で報じられるほどの大きな事故だった。乗車していた7人のうち、唯一の犠牲者となったメンバーは、事故の30分前に自身のブログに「ギリギリ崖っぷちの中での爆走!!」と、仲間の運転ぶりを綴った短い文章をアップしている。不意に最後の言葉となつてしまったその日記は、スタッフ

限で有名だったとあるユーザー。マッサージュチェアで痛みを抑えて、その後も普段通りにフォロワーなどと軽いやりとりをしていた。くも膜下出血で急逝したのは、その翌日だ。死後しばらくして、彼と現実でも交流のあったユーザーから界限に事実が告げられて、生前の知人やファンは悲しみに暮れた。が、体調の悪さを気にしつつも日常を続けた最後の1日のツイートは、やはり現在検索しても当時と変わらないままで表示される。

死んでもサイトは消滅しない

死に際に人の一生が凝縮されるとするならば、多くの人の人生を学びたいときはインターネットを覗けばいい。そう断言すらできる状況だ。しかし、なぜ、亡くなった人の言葉や痕跡が何年も変わらずに残り続けるのか。答えは「わざわざ消す人がいないから」。これに尽きる。

背景には、例外的な問題が起きない限りはユーザーに干渉しているという、サービスを提供する側に通底するスタンスがある。ブログやホームページスペース



動画サイト「ニコニコ動画」界

などを提供するサービスのうち、利用規約に利用者が死亡したときの対応を明記しているものは半数程度で、その多くはユーザーの死亡が確認されたときに事業者判断でサービスの解約を実行できるとしている。しかし、実際に適用される例は皆無に近い。業界大手のアメーバブログの広報担当者は「規約では言及していませんが、我々から進んでユーザーさんが亡くなっていることを確認して退会処理に動くことは一切ないです」と明言する。続けて、あくまで私見として「故人のブログを閉じる必要はあるのかと考えたとき、決してそうではないと考えています。時が経っても価値が変わらない情報はありますから」とも付け加えた。書き手の生死を超えた、独立したコンテンツとしてブログを捉え、あえて消さないという考えもあるようだ。

ただ、それよりも大きいのは、積極的に動いてもリスクとコストだけがついて回るといふ、サービス構造上の特性だろう。ネットサービスは、会員登録時に厳密な個人情報が必要としないものが多い。

特に無料で提供しているサービスには、送受信できる何らかのメールアドレスさえあれば新規アカウントを得られるものが相当数ある。そうしたサービスの利用者が亡くなったとしても、死亡した本人とアカウントを100%確実にひもづけるのは非常に難しい。また、その困難を乗り越えて退会処理を進め、データを抹消したとしても事業者側には何のメリットもない。個別にアカウントを削除してサーバーの空きスペースを確保するのが有効なほど余裕なく運用している状況なら、すでにWEBサービスとして破綻しているし、正しく抹消した実績を積み上げててもそれが宣伝になるシチュエーションは滅多にないだろう。

課金制の有料サービスであっても、料金の引き落とし先の銀行口座やクレジットカードが機能がなくなることが重要であって、契約者の生死は直接的には収益に関係しない。コストをかけたところで何の得にもならないのは無料型と同じだ。

つまるところ、様々な選択肢を合理的に選んでいけば、更新が止まったサイトに

理されるような仕組みにはなっていない。棺だけでなく、ブルーシートもモザイク処理もかけられることはない。それが普通なのだ。

「街の灯り見ると切ない」

そうした土壌からか、本人が最後の記事に遺言や別れの挨拶を載せるサイトも一定のペースで増えている。自らの死を覚悟して「生前」にピリオドを打っている点で、自然と残ってしまったページとはまた違ったものを宿している。

漫画家を目指して作品の投稿を続けて

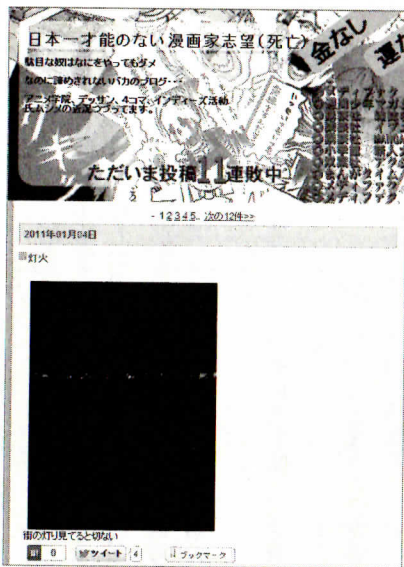
いた20代の男性は、将来が見えない不安と目の前にある貧困を自虐しながら、それでも目標に向かって進む毎日の様子をブログに綴っていた。しかし、2011年の年明けまでもなく糸が切れたように母親と心中を遂げてしまう。最期の日記には、二人の遺体が発見された河川敷で撮ったとみられる対岸の夜景写真に「街の灯り見ると切ない」と一言だけ添えられて

やブログは放置されるのが自然ということになる。実際、ブログやサイトがユーザー側のアクション以外で消滅するのは、事業者自体がサービスの提供を終了する場合と、有料契約で支払いの滞りが続いた場合がほとんどで、他には、ネットス kêルのある遺族や関係者によって削除処理が行われる例がたまにみられる程度だ。ビジネスとしてみれば、契約者が生存中に飽きて放置したページも、特別な思いを込めて遺した遺書のようなページも、書き手の安否が分からないまま動きのないページも、何の思いもない。

だから、事件や災害、病気で亡くなっ

いた。その前日の日記が彼の心を如実に映し出している。朝から夜まで5回にわたって更新しており、夕方に「実は、今日がお正月の休みの最終日であったのです……あの、また職場にもどることが怖い……本当に辛い……」と強い不安を滲ませながらも、夜には購入した新年のカレンダーの写真を披露しつつ、「めっちゃカッコいいガンダム／なんか、トイレには勿体ないくらいね」とくだけたトーンに戻っている。そこから数日間さかのぼっても、気分が上下に激しく揺れながら低空飛行を続けるようなある種の安定感がみられたが、前触れを感じ取れないほどあっけなく終わってしまった。最後の日記のコメント件数はおよそ1500件にもなる。そのうち1000件以上は、自動で投稿される「スパム書き込み」だが、知人や読者による心の通ったメッセージも現在まで続いている。

2011年6月、FXで大損し、残りの貯金がなくなる頃に自殺すると宣言した30代男性は、Xデーを2012年10月29日と設定して、その日が来るまで「死



漫画家志望の男性のブログ



「Kousukeのページ」のスクリーンショット。ブログのタイトルとプロフィールが確認できる。

ブログやサイトへのリンク

息子が書いたブログやサイトを見つけた。息子や息子の大学が書いてくれたものがある。息子は、これらを読んで、その成長のあとを辿ることができた。息子の成長のあとを辿ることができた。

一定期間経過後は削除される恐れもある。ひとりで書くのに読んでいたように、この情報を知りたい方にはお伝えしたければ幸いです。父・母

「法律学徒の手記」

書評、映画評、英語の勉強法、海外旅行記、法律の話題など、興味のあるテーマについて書いたブログ。2007年3月21日～2008年10月6日。記事数166
http://kousuke3.blogspot.com/

「法律学徒の英語と読書の日々」

上記のブログの続き。2008年10月12日～2009年3月27日。記事数60
http://d.hatena.ne.jp/kousuke-1/

「旅する遺伝子」

海外旅行記を中心に掲載するサイトにしたかったようだが、未完成。高校卒業時の2006年3月8日から15日まで母と旅したトルコ旅行の長文の記録(未完)のみが掲載。
http://www.lsl.co.jp/~kousuke/tahi/

「Kousukeのページ」という例もある。近しい人からの「ご冥福をお祈りします」が卑猥な書き込みで飲み込まれたり、その自動書き込みに対して「あまりに非礼で怒りがこみ上げて

けでブログやSNSページを発見しても、ログイン方法が分からず、手をこまねいているという人も少なからずいるのだ。仕方なく無制限で書き込めるコメント欄に計報を載せたものの、まもなくスパムにまみれてしまった

きます」と抗議するコメントが、これまた埋もれたりする様子は、ただただ悲しい。

しかし、家族の死後、ネットスキルもなく、サイトの存在も知らないところから必要な情報を調べ上げて個人ページの書籍化まで果したケースもある。

「更新が途絶えたままだと、やがてブログそのものが削除されてしまうのではな

いかという不安を抱きました」

そう語るのは、2009年に21歳の若さで急逝した伊藤康祐さんの父・俊彦氏だ。生前、康祐さんは国際弁護士を目指して法律と英語の勉強に励んでおり、その考察や日々の気づきなどを、自分で管理している複数のブログに綴っていた。

俊彦氏がその存在を知ったのは康祐さんの没後、ITに詳しい共通の知人を介してだった。初めて知る息子の記録に触れ、保存したいと強く考えたとき、まずその不安が頭をよぎったという。

「ただ、問い合わせるにもどこにどう連絡すればいいのか、利用している本人が亡くなっているため分かりませんでし

は、不確定要素がそこにある。いかようにもなり得る状態だけに、積極的に働きかける意志の強さがものを言う。曖昧な部分が少ない完成しきった業界と比べて、自分の都合のいい形にできる余地が多分にあるのだ。そうして個別の案件によって固められていく輪郭は、今後の枠組みの形成にも少しずつ着実に影響を与えていくはずだ。

2013年現在、死後の扱いに関するユーザーからの問い合わせは、どのサービスでもまだ圧倒的に少ない。ツイッターは2010年に「亡くなられたユーザーに関するご連絡」という遺族用の窓口を設けたが、問い合わせ件数は世界合計でも数えるほどしかない。2012年前半の依頼件数は、世界合計でゼロだったという。亡くなったユーザーのページを保護しつつ、友人知人のコメントだけ受け付ける「追悼アカウント」機能をFacebookが提供していることを知らずにいる人も多く、通常アカウントのまま家族や友人の死を悼む光景もよく目にする。サービスの提供側も利用する側も、

た。自身もFacebookでコミュニケーションをとる程度にはインターネットに親しんできたが、ブログやSNSの情報がユーザーの死後、どのように扱われるか思いを巡らしたことはなかった。だからこそ、消滅させないために打てる手はすべて打った。実家暮らしだった康祐さんの遺品は多い。パソコンの自身は1ヶ月かけて精査して、ブログの文章やメールを外部HDDにコピーした上で、すべて印刷して紙のバックアップも残した。有意なデータは膨大で、A4ファイ

ル15冊に及んだ。先の共通の知人の協力により、それらの情報と康祐さんの複数のブログや活動の痕跡をあわせた追悼サイト「Kousukeのページ」を立ち上げたのは没後2ヶ月経った頃だ。サイト開設の知らせは、携帯電話に残っていた知人とみられるメールアドレスすべてに計報とともに送信。返信してくれた人のうち、ある著名なブロガーが、ブログ提供会社に問い合わせをして存続の道を探ってくれたという。

それでも、ブログが消滅する不安は完

死後のネットのスタンダードを作れるほどの経験は、現時点ではまだ持っていない。多くの部分はこれから積み上げていく必要があるのだ。

ネットの痕跡は土に還らない

人間は死んで放置されると、腐敗して骨になりやがて土に還る。現在の日本では大抵腐敗する前に火葬して灰にするが、いづれ墓の底で土と一緒にするのは変わらない。家や衣類などの持ち物も、放っておけば朽ちていくか他人のものになっていく。知人と共有した思い出も含め、人の痕跡は少しずつ消えていくのが自然だ。これまでも死後、文章や写真、映像という形で生前の記録が残っていくことはあったが、それらが「物」として残る限り劣化は避けられず、やがて褪せていく運命だった。しかし、ネットに残した痕跡は、デジタルデータとしていつでも一発で検索できる状態のまま、永久に残り続ける可能性がある。ネットが日常の中に深く入り込んだいま、私たちはこの特性をどれだけ自覚しているだろうか。